金泰暻『一九二〇―四〇、モダニズム、ナショナリズム――横光利一文学論――」審査報告書

小森陽一

金泰暻氏の博士学位請求論文『一九二〇―四〇、モダニズム、ナショナリズム――横光利一文学論――』は、横光利一の小説の分析をとおして、第一次世界大戦と第二次世界大戦の間における日本のモダニズムが、どのようにナショナリズムに回収されていったかを明らかにしようとした。

本論文は大きく二部構成になっている。第一部では横光文学におけるモダニズムの特質を「『経済』を見る眼」として位置づけ、六章を立てて、「蠅」、「頭ならびに腹」などの初期小説から、「寝園」、「機械」、「紋章」などの主要作品を分析している。あわせて「芸術大衆化論争」や「形式主義文学論争」における、理論的探究に言及したうえで、「資本主義」という経済体制と、「国家主義」という政治制度の表現の問題性を、「新感覚」と「新心理」という方法によって、横光利一が小説として再構築していく過程を明らかにした。

なかでも二章にわたって詳細な表現分析を行ったうえでの「機械」論においては、同時代のマルクス主義文学陣営との論争的関係がとらえられている。また昭和恐慌を同時代的に問題化した「寝園」論では、金融資本主義と実体経済との乖離に、横光が意識的であり、そのことが小説の構成としてあらわれていることが証明されている。第一部では、「感覚」や「心理」を通じて現象し、かつそれらを規制する事態として、横光文学が捉えた「経済」の在り方が明らかにされている。

第二部では、九章にわたって横光利一の最後の長篇小説「旅愁」が論じられている。金氏の独自性は、「旅愁」の中で繰り返し作中人物の間で議論される「建築論」を中心にすえたところにある。ノートルダムの建築様式と俳句の相似性を主張する作中人物の議論を軸にしながら、この特異な設定を通じて、西洋対東洋、ヨーロッパ対日本という図式に抵抗しようとする横光利一の姿勢が明らかにされていく。

同時に「旅愁」における「チロル」という場の位置づけについては、一方でヨーロッパと日本の相似性を浮かびあがらせるものの、他方では作中人物が「日本人」意識を強化する場として、両義性を持っていることが指摘されている。「旅愁」の執筆過程の中で、横光の中で生じていくナショナリズムへの傾斜を、金氏は文学的表現とイデオロギー的表現が葛藤する様態を精緻に分析していくことでとらえていこうとした。

金氏の「旅愁」論の、もう一つの独自性は日本人の作中人物だけでなく、上海出身の高有明や朝鮮半島の小説内的役割を重視したところにある。金氏は日本人、作中人物のナショナリズムと、高有明のナショナリズムとを詳細に対比していくことによって、社会進化論的「競り合い」に対する、「旅愁」における批判的契機をとらえることに成功した。この分析を通じて、金氏は「神がかり的な国粋主義」と欧米列強的な「帝国主義」の反復再生産を批判的に相対化しうる「旅愁」の新しい読み方の可能性を提示している。

博士論文提出資格審査から本審査に至る過程で審査委員会委員から出された、横光利一の最初の長篇小説である「上海」についての分析が行われていないことは横光利一の文学の全体像をとらえるうえで問題があるという指摘をふまえ、金氏は終章において、第一部と第二部を連結する「上海」の分析を行った。金氏は「芸術大衆化論争」と「形式主義論争」という二つの論争とのかかわりで、「上海」を位置づけなおし、「物自体の動き」をとおして、「世界資本主義が金融資本の海外への膨張という新しい帝国主義に転換しているこ

とを正確に捉え」たことを明らかにした。

「上海」に独自な章をあてなかったことをはじめとして、審査委員からは論文全体の構成と配分に関して、いくつかの指摘があり、最終的な提出にいたるまで、書き直しが行われていった。しかし「経済」という観点から横光利一の文学の全体像を新たに捉え直す可能性を内在させており、「旅愁」についても従来の解釈を転換しえているという判断のもとに、最終的には博士論文として認められるという結論にいたった。したがって、本審査委員会は、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものとして認定する。

主査：小森陽一　（言語情報科学専攻　教授）
副査：エリス俊子　（言語情報科学専攻　教授）
田尻芳樹　（言語情報科学専攻　准教授）
藤井貞和　（立正大学　教授）
十重田裕一　（早稲田大学　教授）